

令和 4 年 4 月 13 日

福島と台湾の交流を一步前へ

『福島の学生から台湾の友人たちへー私たちの福島生活31のストーリー』の発刊

行政政策学類政治過程論演習(大黒太郎ゼミ)では、福島大学生の日常生活を台湾の友人たちに伝える『福島の学生から台湾の友人たちへ 私たちの福島生活31のストーリー』を発刊しました。

本書は、日々の暮らしの中に時々顔を出す東日本大震災の被災地としての福島の顔、学生たちのゼミ活動での復興への取り組み、そして福島の農と食、地域活動、そして国際交流まで、福島に生きる学生たちの日常を伝えるものです。日本語と中文(台湾繁体字)で綴られた200ページを超える新書版冊子で(中文タイトルは、『傳達給臺灣的朋友們 福島學生的日常生活』)、今後両国で配布します。

お互いがより深く相手を理解し、また共感をもつことは、友人関係の基礎です。福島とそこで生活する私たちの日常を知ってもらい、そして私たちを信頼し、好きになってもらうこと、本書で語られた福島大学生の日常を追体験することを通じて、台湾により多くの友人たちが持てるようになることを期待しています。

台湾の友人と私たち、すなわち福島大学行政政策学類の学生たちとのつながりは、2019年3月にさかのぼります。私たちの初めての台北訪問以降、コロナウイルスの蔓延で直接訪問が難しくなるまでの間に、台湾側から3グループが福島を、福島側から2グループが台湾を訪問しています。

交流を通じて台湾の学生に私たちが伝えたかったこと、それは、私たちの日常生活です。毎日、大学の講義に出席して勉強し、その後はアルバイト、夜は友達と食事をして、ネットでつながってゲームをしたり、休日は友達とスポーツやラーメン屋めぐり...といった大学生の日常とは、日本でも台湾でも、どこに住んでいても同じようなものでしょう。

しかし、福島の学生たちの日常生活が他の地域の学生と少し違うのは、2011年の大震災と事故で被災した人たちや地域が、いつも身近にそばにいる、あるということです。家族でなくても親戚が、親戚でなくても友人が、津波被害で家族の誰かを失くしたり、家を流されたりしています。原発事故による放射能

汚染で避難を余儀なくされた親戚がおり、また、避難によって生業を失った両親を持つ友人もいます。県内を旅行すれば、青々とした稲がうねっているはずの夏に、雑草が生い茂ったままの田畑が広がり、除染ゴミが集められた黒いフレコンバックが積み重ねられている地域を目にします。楽しい学生生活と厳しい被災地の現実 それを日々の生活のなかで経験するのが、福島の学生たちです。

同世代の台湾の友人たちに伝えたかったのは自分たちのこうした日常です。大学生としての楽しい生活を送るなかで、被災地の厳しい現実を思い知らされることもあります。しかし、そうした厳しい現実のなかでも、復興支援活動を通じ、得られる地域の方々や仲間たちとの楽しいひと時もあります。福島大学生のこうした日常を、台湾の友人たちと共有することが本書の目的です。

本書には、福島大学生の日常生活が31のストーリーとして収録されています。台湾の友人たちにも文句なしに共感を得られる大学生の恋愛事情から、台湾の友人たちにもぜひ体験してもらいたい会津の自然の美しさ、須賀川のお祭りや郡山の定食屋の話や誰もが笑える方言の話、そして飯舘村の「米」を使ったイベント企画、大学生になって芽生えたふるさと双葉への新たな思いまで、きっと福島と福島の学生のこと好きになる話ばかりです。

お互いが相手をより深く理解し、共感を持つことは友人関係の礎です。本書を通じて、台湾により多くの友人たちが持てることを期待しています。

なお、本事業は、福島大学行政政策学類大黒太郎ゼミと、一般財団法人飯舘までい文化事業団との共同事業です。

(お問い合わせ先)

行政政策学類・准教授 大黒太郎

電話：024-548-8026

メール：a027@ipc.fukushima-u.ac.jp